おしゃべりコーナー

（目次）

＜今月の歌＞
「知床旅情」　（竹の台・米田哲夫）

＜ショート・ショート＞
「炬燵（こたつ）」　（春日台・大西　No.16）

＜西神の花＞
「なんてんの実」　（竹の台・島田　No.4）

＜9条街角ギャラリー＞
「西神中学校正門の標語」　（竹の台・タイガー）

＜今月の歌＞

『知床旅情』

作詞、作曲、唄：森繁久彌

https://youtu.be/CQCe7UTJbO0?si=RHSAdMHQUW71VAjO

青春時代には逍遥に憧れるものです。

　２０代そこそこ、以前紹介した春日台のＯ君と北海道を１０日間旅しました。啄木が住んでいた小樽、函館、釧路そして根室半島、大雪山縦走、網走から知床へと。

ほとんどバスと国鉄。宿泊はユースホステル。
知床で夜、見知らぬ青年から知床の海を前にして
「知床旅情」を教わりました。
（まだ加藤登紀子が歌っていなかった頃です。）

♪　知床の岬に　はまなすの咲くころ
　　思いだしておくれ　俺たちのことを
　　飲んで騒いで　丘にのぼれば
　　はるかクナシリに　白夜はあける

♪　旅の情か飲むほどに　さまよい
浜に出てみれば　月は照る波の上
今宵こそ君を　抱きしめんと
岩陰のによれば　ピリカが笑う

♪　別れの日はきた　ラウスの村にも
君はでてゆく　峠を超えて
忘れちゃいやだと　気まぐれカラスさん
私を泣かすな　白いかもめよ
白いかもめよ

（竹の台　米田　哲夫）

目次へ

＜ショート・ショート＞　ちょっとした気づきやつぶやき・・・

「炬燵（こたつ）」

冬になると炬燵を想いだす。

子供の頃、
熾（おこ）した炭がはいった陶器を
やぐら炬燵に入れ、暖をとっていた。

母は「おこた」と呼んでいた。

そのうち炭が炭団（たどん）に替わり
電気炬燵が登場した。

小さな炬燵は、食卓にも、宿題をする机にも、
新聞をひろげる台にもなり、
家庭の中心にあった。

初任地の北関東の冬は厳しくて、
最初に買った電気製品は炬燵だった。

阪神大震災の数年前、
実家を建て替えたとき
掘り炬燵を作ってもらった。

祖父が自室として暮らしていた炬燵を
小さな孫たちがおやつを貰いに囲んでいた。

炬燵は、囲炉裏がそうであったように
家族が集い、暖かく家庭を支えていたのだ。

（春日台・大西　No.16）

目次へ

＜西神の花＞

「なんてんの実」

　西神 5 号線沿いの美賀多台２丁目バス停（竹の台側）で撮影。中国原産だが、南天竺から来たという伝説で、南天と呼ばれるようになったとか。寒空に赤い実をつけてくれ、縁起もよく、お正月の飾り物にも多用される。

（竹の台・島田　No.４）

目次へ

<9条街角ギャラリー>
「西神中学校正門の標語」

西神中学校の正門に写真の標語が長く掲示されています。

「ごめんなさい」言える勇気と許せる心

法務省の「社会を明るくする運動」の一環で、西区の保護司会で２０２０年に選ばれた標語とのこと。以来５年間、散歩の道すがら、目にする度に「何とも響きの良い標語やな」と感心しています。

今では、風雨に晒されてだいぶ朽ちてきましたが、取り替えられずに残っているのはそれなりに、評判がいいのかも知れません。

子供が悪さをしても、なかなか素直に「ごめんなさい」と謝れないことは学校や家庭でよくあるシーンです。なんやかや言い訳を考えて、「ぼくのせいじゃない！」と言い張る姿は、成長過程と思えば、微笑ましくもあります。

しかし、社会の強い立場にいる人が、何かの拍子にしくじった時、「私は間違っていない」と言い張るのは、由々しき事態になりかねません。周囲の忖度も絡み、場合によっては人が死ぬこともあります。

まず想い出すのは、故安倍首相が森友問題に関する 2018 年の国会答弁で、「私や妻が関係していたということになれば、それはもう間違いなく総理大臣も国会議員もやめる」と発言したことです。その直後から、近畿財務局では、総理の発言と矛盾しないよう公文書の改ざんが行われ、責任を感じた赤木さんの自死に至りました。安倍さんが、「ごめん、ちょっと調子に乗って言い過ぎた」と頭を掻いていたら、あるいは、公文書の改ざんも不要で、赤城さんの自死も防がれたはずです。おおらかな国民なら、「安倍さんでも言い過ぎることはある」と許したかも知れません。

次に思い出すのは、今も引きずっている斎藤兵庫県知事の文書問題です。2024年、外部通報された知事批判文書を入手した時、斎藤知事は公益通報者保護法で定められている通報者保護を無視し、禁止されている通報者探索を強行、懲戒処分にしました。おまけに、通報者の人格を貶めるような動きもあり、その後、通報者の元西播磨県民局長は自死に至りました。この時も、「ちょっと腹が立って、怒りに任せてしまった」とひとこと謝罪する度量があれば、ここまで県政の混乱が続くことはなかったでしょう。

そして、今回の高市首相の台湾有事に関する国会答弁。女性初の首相になって舞い上がったのか、官僚の回答案にない無防備な発言をしてしまいました。その結果、日中関係がぎくしゃくし、経済損失もじわじわ広がり、我が国にとって何の得もない不幸な状態が続いています。しかし、未だに、高市さんは「ごめん、言葉が過ぎた」とは言わない、言えない状況が続いています。

日本の国力が落ち目になった近年、どうも、「**謝ると死ぬ病**」が蔓延しているのかも知れません。本当に強い人なら、状況を冷静に見、自らの非を認める勇気がありますが、そうでない人が権力を持つと、子供じみた行状になるようです。国民は人物をよく観察する目を養うのが自分たちの生活防衛のために不可欠ですね。

（竹の台・タイガー）

目次へ